

対馬の闇Ⅲ

妹の執念

春日信彦

麻薬探知犬

新元号、令和が発表された4月1日（月）、沢富は対馬北警察署に赴任した。住居は、当初から伊達との同居を予定していた比田勝郵便局近くの2LDKのマンション。年明早々、身分を隠して対馬に赴任した伊達は、クラブ・アリランのマスターとして統括任務についていた。また、日々、クラブ・アリランの上階にある事務室に設置された5つのモニターTVでお客の動向を観察していた。7日（日）、沢富の手作りの朝食を終えた二人は、キッチンテーブルで向かい合いミーティングを開始した。早速、沢富は、内部人事に関する調査報告をした。

*警察署長の岸信也、50歳。昭和大卒。3年目。出身地は山口県田布施町。趣味はゴルフと囲碁（アマ3段）。愛車はレクサス。座右の銘は”千里の道も一歩から”。尊敬する人は吉田松陰（長州藩士）。*警部の佐藤栄一、48歳。昭和大卒。17年目。出身地は山口県田布施町。趣味はゴルフと釣り。愛車はクラウンアスリート。座右の銘は”彼を知り己を知れば百戦して危うからず”。尊敬する人は高杉晋作（長州藩士）。*警部補の安倍真治、38歳。平成大卒。5年目。出身地は山口県田布施町。趣味はゴルフと釣り。愛車はボクシー。座右の銘は”郷に入れば郷に従え”。尊敬する人は伊藤博文（長州藩士）。*巡査長の須賀義英、27歳。上対馬高卒。新任。出身地は長崎県対馬市。趣味は野球と釣り。愛車はソリオ。座右の銘は”虎穴にいらずんば虎児を得ず”。尊敬する人は坂本龍馬（土佐藩郷士）。

沢富は昨年亡くなった出口巡査長と彼らとの関係について、わかり次第、伊達に逐一報告することになっていた。赴任早々、署内での聞き込みでてこずっていたが、それよりも厄介なひろ子からのお願いで頭が痛かった。そのお願いとは、麻薬探知犬を探してほしいということだった。ひろ子は、麻薬が詰め込まれた車を発見するためにどうしても麻薬探知犬が欲しかった。そこで、麻薬探知犬を探してほしいと沢富にお願いした。一生のお願いとせがまれた沢富は、しぶしぶ引き受けたが、現役を引退した麻薬探知犬を探し出すと言ってもそう簡単なことではなかった。東京、大阪、鹿児島、福岡、長崎などの麻薬探知犬管理センターに2ヶ月以上にわたって問い合わせた。3月中旬、幸運にも対馬に近い佐世保市に、年老いた麻薬探知犬を飼っている愛犬家を見つけた。

でも、ひろ子の今後の活動を考えると、その麻薬探知犬を譲り受けるべきか悩んでいた。ひろ子には、その老犬はすでに人間であれば70歳を超えていて、飼育が難しいからあきらめてほしいと伝えたが、ひろ子とはにかくほしいから交渉してほしいとかたくなに沢富の意見を受け入れなかった。沢富は、一人で悩んでいても解決できそうもなく、伊達に相談することにした。キリマンのコーヒーを一口すするとしかめっ面になった沢富は、伊達に話しかけた。「先輩、ちょっと厄介なことが起きました。聞いてもらえますか？」まさかとは思ったが、赴任早々、沢富の素性が怪しまれ始めたのではないかと不安になった。「え、どういうことだ。話してみろ」沢富は、思い切って仕事と関係ないひろ子のお願いを話すことにした。「いや、仕事と関係ないんですが、ひろ子さんことで悩んでいるんです」

ひろ子と聞いてますます不安になった。今回の対馬特命任務のことでひろ子から嫌われ始めたのではないかと不吉な予感がした。「そうか。危険な任務だし、キャリアが離島の対馬だもんな～。無理もないか。そうか。そうか。もともと、無理押しの縁談だし。俺たちの責任でもあるし。でもな～、ナオ子は、張り切ってるし、困ったな～」沢富は、何を独り言を言ってるのかと怪訝な顔で伊達の顔を覗き込んだ。「先輩、何ぶつぶつ、言ってるんですか？」伊達は、即座に立ち上がり頭を下げた。頭をゆっくり持ち上げると直立不動で謝罪した。「すべては、俺が悪い。こんな危険な任務に引っ張り込んで、すまなかった。あの時、俺一人で行くと言えなかった自分が恥ずかしい。心配するな、俺が、ひろ子さんに土下座する。あ～～、でもな～、ナオ子は何というだろうか？」

沢富は、伊達の妄想にあきれ返った。「先輩、座ってください。僕の話聞いてください」伊達は、ゆっくりと腰を落とし沢富の顔をじっと見つめた。「怒ってないのか？」沢富は、あきれた顔で話し始めた。「ひろ子さんの話というのは、何というか、犬の話なのです。それも、ちょっと厄介な犬の」犬と聞いた伊達は、何のことやらさっぱりわからなくなった。「ひろ子さん、福岡で犬を飼ってたのか？もしかして、引っ越ししたから、犬をこのマンションで飼ってくれて言ってるのか？それはムリだ。このマンションは、ペット禁止だ。それとも、犬にかまれたのか？まさか、狂犬病になったとか？」クラブのマスターをやるようになって、ちょっと頭がおかしくなったのではないかと怪訝な顔で返事した。「何言ってるんですか。犬というのがですね～、麻薬探知犬なんです。麻薬探知犬を飼いたいから、探してほしいと頼まれているんです」

麻薬探知犬と聞いた伊達も首をかしげた。「麻薬探知犬を飼いたいと言ってるのか。現役の麻薬探知犬を飼うことはできないから、引退した老犬ということになるが、どうするつもりなのかな〜」沢富もひろ子の考えがよくわからなかった。麻薬探知犬と言っても老犬になれば、嗅覚も劣るし、健康状態も不安定になっている。そんな老犬を飼っても飼い主が苦勞するのは目に見えている。現在の飼い主も誰にでも譲るといことはしない。愛犬家で老後をしっかり面倒見てくれる人でなければ、譲らないはず。「まったく、困ったものです。ひろ子さんは、麻薬探知犬を簡単に譲ってもらえると考えているんですよ。麻薬探知犬は国家のために働いた犬なんです。安易な気持ちで国家の犬を預かることはできないのです。しかも、老犬です。病気をさせて、病死させたりしたら、僕が責任を取らなければならないんです。先輩から、あきらめるように、言ってもらえませんか」

腕組みをした伊達は、何度もうなずきながら、話に聞き入っていた。沢富が言っていることは、至極もつともだと思った。「老犬を譲ってもらっても、飼うのは、マジ、大変じゃないか。老犬って、何歳ぐらいなんだ？」佐世保市の飼い主から聞いた年齢を伝えた。「それがですね、なんと、人間の年齢に換算すれば、70歳を超えているそうなんです。今は病気はしていないそうなんですけど、あと何年生きるやら」70歳以上と聞いて、こんな老犬を飼っても死に水をとるために飼うようなものだと思った。「おい、70歳以上かよ。死にかけじゃないか。散歩もろくにできないんじゃないか？そんな老犬、やめとけ、やめとけ」困り果てた表情の沢富は、冷たくなったコーヒーをグイッと飲み干した。ひろ子には、老犬であることは、伝えたが、ひろ子はそれでも飼いたいと駄々をこねていた。

肩を落とした沢富は、あきれた顔で返事した。「先輩もそう思いますよね。70歳以上の老犬だから、飼うのは難しいと何度も言ったんです。それでも、欲しいというんです。先輩から、何とか言ってください。僕の話は聞かないんですから。まったく、あんなに頑固だとは思いませんでした。先が思いやられます」いやな役を押し付けられた伊達は、即座に返事した。「おい、俺に押し付けるなよ。頼まれたのは、お前じゃないか。今から、尻に敷かれて、どうするんだ。ダメなものは、ダメと、ガツンと言ってやれ」眉を八の字にした沢富は、ティファールの湯沸かしポットに水を入れるために席を立った。テーブルに戻ってくるとセットしたポットのスイッチをカチンと押して、ため息をついた。

ドスンと腰を落とした沢富は、ぼやくようにつぶやいた。「死にかけの老犬を飼って、どうする気ですかね。老犬に麻薬探知の仕事をさせる気でしょうか？まったく、老犬にとっては、拷問じゃないですか。早死にさせる気ですかね～～。まったく、ひろ子さんの性格がわかりません。結婚生活、うまくやれるんでしょうか？やっぱ、早まったかな～～。もう一度、考え直したほうがいいですかね？」伊達は、目を丸くした。ちょっとまずい方向に向かっていると感じた伊達は、助け舟を出すことにした。「おい、そう、悲観するな。女性というものは、男には理解できない妖怪みたいな動物だ。今から弱気でどおする。わかった、俺が説得してやる。おい、ひろ子さんを呼べ。今すぐ、電話しろ」パツと沢富の顔に笑顔が浮かんだ。伊達の気持ちが変わらないうちにと思い、即座にスマホを手にした。

ひろ子は2月からヤマネコタクシーで働いていた。”水の星に愛をこめて”の着メロが鳴った時、比田勝港国際ターミナルのタクシー乗り場でお客を待っていた。沢富からと確認したひろ子は、即座に応答した。「ナニ。うまくいったの？」言いにくそうに沢富は、返事した。「まあ、何とか、なるかもしれないけれど、今のところ、何とも言えない。ところで、今日、先輩のマンションに来れないかな～～。ナオ子さんも一緒に」ひろ子はうまくいったと勘違いして、即座に返事した。「わかった。今日は、4時には上がるから。また、行く前に電話する」電話を切った沢富は、笑顔で報告した。「今晚、来るそうです。先輩、頼みますよ」伊達は、勢いで引き受けたもののちょっと不安になってきた。

説得するためにも70歳を超えた老犬についての情報を得ることにした。「そうか。ところで、その老犬なんだが、どんな犬だ。シェパードか？ラブラドルか？俺は、犬を飼ったことがないから、犬のことはよくわからん。ペットを飼うって、大変なんだろう～～」佐世保市の老犬についてわかっている範囲で、話すことにした。「僕も麻薬探知犬といえば、シェパードとかラブラドルだと思っていたんですが、その老犬は、オスのかわいいビーグル犬なんです。名前は、ビヨンド号というそうです。でも、やはり老犬ですから、散歩もヨロヨロして危なっかしいそうです。今は、病気していないそうですが、食事も少なく、長生きしそうにないそうです。散歩以外は、のんびりとリビングで寝ているそうです。後、2、3年じゃないかと言っていました」

やはり死にかけの老犬と判断した伊達は、うまく説得できそうな気分になった。「やっぱりな。死にかけか。ひろ子さんも、ヨボヨボで、後、2、3年と言ってやれば、あきらめるさ。任せとけ」ちょっと心配だったが、沢富は引きつった顔でうなずいた。沢富はひろ子の考えていることが、さっぱりわからなかった。麻薬探知犬と言っても、散歩も危なっかしい老犬だから、麻薬探知の仕事はできないはず。それなのに、なぜ、そこまで欲しがるのか不思議でならなかった。「先輩、ひろ子さん、麻薬探知犬を飼って、どうするつもりなんでしょうかね～。散歩もろくにできない老犬ですよ、麻薬探知の仕事は、できませんよ。さっぱりわかりません」

伊達は、犬を飼ったことがなく、あまりピンとこなかったが、おいぼれで死にかけの犬を飼っても、大変な世話を強いられて、飼い主が困るだけのようには思えた。沢富が言うようにいったい何のために老犬を飼う気なのか不思議だった。「まったく、サワの言うとおりでな。おそらく、麻薬探知犬としては、使い物にならないと思うな。まあ、たとえ、麻薬のにおいを覚えていたとしてもだな～、麻薬を発見させるには、優秀なハンドラーがいなくてはならないんだ。ハンドラーがいての麻薬探知犬だから、ひろ子さんが連れて回っても、意味がないってことだ。おそらく、ハンドラーのことがわかってないんじゃないか」沢富は、目を輝かせてうなずいた。「そうです。その通りです。僕も聞いたことがあります。確かに、犬も優秀でなければなりません、麻薬探知犬を活かすには、ハンドラーの腕にかかっていると。先輩、ガツンと言ってやってください」

沢富は、伊達の説得に期待が持てそうで気分がよくなってきた。「ところで、クラブ・アリランのほうは、うまくいってますか？今日は、何時から仕事ですか？」ママがスタッフを管理していたため、伊達は、いつも8時過ぎにクラブ・アリランに顔を出していた。幸運にも3月には若くてかわいいホステスたちが入って来た。「俺は、いつも、8時過ぎに顔を出すことにしている。ママが取り仕切っているから、心配はいらん。今のところ、怪しいやつは現れていない。でも、きっと、北署内にマフィアとつながっている奴がいる。サワ、お前にかかっている。頼むぞ」

失恋自殺？

沢富も北署内に必ずいると思った。昨年、出口巡査長が謎の事故死をしたことを考えると、大村警察署から赴任してきた須賀巡査長は、必ず、密輸にかかわるとにらんでいた。新しく赴任してきた須賀巡査長は、かつて、長崎警察署時代、安倍警部補の部下だったらしい。当然、密輸は、何人かのグループでやっている。中国マフィア、韓国マフィア、国内の暴力団、日本の警察、が絡んだ大掛かりな密輸に違いない。いや、市議員も絡んでいる可能性もある。彼らは、摘発されやすい旅客機や客船を使わないはず。きっと、漁船を使っている。漁船を使って持ち込まれた麻薬は、どこの港に運び込まれ、だれが、どこに運び込んでいるのか？対馬に運び込まれた麻薬をどのような方法で関東、関西に運び込んでいるのか？その時、警察がどのようにかかわっているのか？

小さな漁船であればどこの岸にでも接岸できる。となれば、対馬沿岸だけでなく、長崎沿岸、佐賀沿岸、福岡沿岸、山口沿岸、島根沿岸、それら辺りであれば容易に接岸できるはず。いや、あまり広範囲に考えても手掛かりはつかめない。やはり、突破口は警察官とのかかわり。「先輩、今回赴任してきた須賀巡査長がにおいます。とにかく、彼と親しくなって情報をとってみます。ところで、マトリの鹿取さんと草風さんから、何か情報は入ってますか」マトリの二人は、今のところ何一つ手掛かりがつかめないことに焦っていた。「いや、まったくこれといった手掛かりはない。密輸のプログループだ、そう簡単には尻尾を出すまい。今回の手掛かりは、何といっても、出口巡査長の事故死だ。必ず、警察内部に仲間がいる。警部か？警部補か？いや、警察署長か？疑えば、きりが無いが、必ず、出口巡査長に指示を出していたやつがいるはずだ」

沢富は、ドリッパーにブラウンのペーパーフィルターを押し込むと、タッパーウェアのキリマンジャロコーヒーの粉をメジャースプーンで約20グラムほどすくって入れた。次に、ドリップポットで小さな”の”の字を書くようにゆっくりとお湯を注ぎ、サーバーに落とした。二つのコーヒーを淹れると一つを伊達に差し出した。「どうですか、キリマン。おいしいでしょ」伊達は、コーヒーを淹れるのが面倒くさくて、いつもお茶を飲んでた。「サワは、まめだな～～。確かに、うまい。いい香りだし、プロみたいじゃないか。いつも、こうやって飲んでいるのか？」サワは、ドヤ顔で返事した。「はい。コーヒーを淹れるのが、趣味みたいなもので。コーヒーの香りをかきながら、ゆっくりと淹れていると、心が落ち着くんです」伊達は淹れたてのコーヒーがおいしいことに納得したが、自分で淹れて飲む気にはならなかった。「対馬にいる間は、サワのコーヒーが飲めるということだな。感謝するよ」

沢富は、香りをかきながら一口すすり伊達に話しかけた。「先輩、大胆な仮説ですけど、こんなのはどうでしょう。漁船に積み込まれた麻薬なんですが、その麻薬は、警部の自宅に運び込まれている。そして、その麻薬をゴルフクラブのヘッドの中に隠す。警部は巡査長をメンバーとしてゴルフに誘い、ヤクザとゴルフをする。そして、ラウンド中に麻薬が詰め込まれたゴルフクラブをヤクザに渡す。どうでしょうか？こんな手口」伊達は、大きくうなずくとコーヒーをすすった。「なるほど、仮に、麻薬が警部の自宅に運び込まれていたのだったら、これほど安全な場所はないな。かなりしっかりした情報がないと、家宅捜索はできんからな。ゴルフクラブのヘッドか。意表を突いたアイデアだな。考えられないこともない」

伊達は、沢富の仮説をヒントに改めて出口巡査長の死について考えてみた。出口巡査長は、正義感の強い青年だったに違いない。ということは、警部に指図されたからといって、麻薬の仲介などしないはずだ。ということは、麻薬の仲介だとは知らずに麻薬を仲介していた。ところが、何かのきっかけで、偶然、自分が麻薬の仲介をしていることに気づいた。それで、警部にそのことを確かめた。麻薬の仲介のことに気づかれた警部は、将来の昇進を条件に麻薬の仲介について黙っているように説得したが、逆に、出口巡査長は麻薬の仲介をやめるように警部に進言した。このままでは、出口巡査長は自首する可能性があると思った警部は、事故に見せかけて、ヤクザに殺させた。仮に、麻薬の仲介拠点として、警部の自宅が使われていたとしたならば、かなり厄介なことになる。伊達は、大きなため息をついた。

沢富も内部犯行だったら、困難極まりないと考えていた。「先輩、そう、暗い顔をしないでください。とにかく、警察署長の家にも、警部の家にも、警部補の家にも、何とか口実を作り、遊びに行って、家の中を探ってみます。きっと、何か手掛かりをつかんで見せます。今、警察内部に巣くったガンは増殖しているのです。一刻も早く、切り取らないと警察の正義がなくなってしまう。でも、焦っても、ことを仕損じます。腰を据えて、じっくりとやりましょう」伊達は、国家のための特別任務とはいえ、対馬に左遷されて憂鬱になっていた。将来、二度と福岡に帰れないのではないかと不安になっていた。「お前はいいよな。キャリアなんだから。1年、対馬で冷や飯を食らっても、警察庁での出世というご馳走がある。俺には・・・」

キャリアの沢富は、警察内部の腐敗を調査するために、警察署勤務を命じられていた。いずれは、警察庁に戻り、警察庁での出世が約束されていた。それに比べ、3流大学卒で地方公務員の伊達には、出世の道はなかった。奇跡的に警部になれたが、いつでも左遷される身分だった。伊達には、警部昇進の引き換えに、対馬勤務を命じられたように思えた。もしそうであったなら、警部補のままでいたほうが、よっぽどましのように思えてならなかった。マトリに協力することは、警察官としては、誇りに違いない。でも、これは、左遷するための口実ではないかと思えてきた。また、聞くところによると、政府は公務員を減らす方針を打ち出している。そのことを考えると、落ち込んでしまい、やる気も出なかった。

伊達の落ち込み様は今まで見たことがないものだった。沢富は、少しやつれ気味の伊達の表情を見て、慰めることにした。「先輩らしくないですよ。人生、野となれ山となれ、じゃないですか。対馬の任務をやったのければ、一気に、先輩の株は急上昇ですよ。対馬赴任も、僕たちの運命だと思って、対馬を守りましょう。そうだ、春日神社にお参りしましょうか。春日神（かすがのかみ）は日本の守護神といわれているんです。僕は、東京にいた時も、京都にいた時も、福岡にいた時も、春日神社にお参りしていたんです。そうすると、いいことが起きるんです」伊達は、ここ最近、藁（わら）をもすがる思いだった。このままだと、対馬で殉死するんでないかと不安に駆られていた。「おい、春日神社って、どこにあるんだ。俺に取りついた悪霊を取り払ってもらいたい。おい、どこだ。教えてくれ」

沢富は、マジになった伊達を見て笑いが込み上げてきた。「先輩、春日神社って、全国に、1000以上もあるんです。対馬にもあるんですよ。国道382号線沿いにあります。ドライブがてら、行ってみましよう」ほんの少し気が楽になったのか、伊達は子供のような笑顔を浮かべると殉死した出口巡査長について話し始めた。「おそらく、出口巡査長は事故死だと思うんですが、どうも、すっきりしない。比田勝の人たちから、出口巡査長についてのうわさを聞いたんですが、彼らのほとんどは、自殺だというんだ。島育ちの青年が、事故死するとは、考えられないそうさ。いわれてみると、自殺が正解かもしれんな。俺も、事故死っていうのは、ちょっと納得がいかん。仕事のことで悩んでいて、自殺したのかもしれない。サワは、どう思う？」

ふんふんと沢富は、うなずき、同調した。「僕も、事故死じゃないと思います。自殺か殺害でしょう。いずれにせよ、何らかの事件が引き金になっていると思います。今のところ何の手掛かりもありませんが、これからという青年警察官が自殺したと仮定すれば、よほど深刻な悩みがあったに違いありません。まあ、恋愛の悩みで自殺する男性もいないとも考えられませんから、失恋しての自殺ってこともあり得ますね」ちょっと首をかしげた伊達だったが、沢富のような考えもあるような気がしてうなずいた。「なるほどな。失恋か。俺には、考えられないことだが、平成の若者には、そういうのもいるかもしれんな。結婚を親に反対されて、手と手を取り合っただけで心中した話を聞いたことはあるが、男子が失恋して自殺したという話は、聞いたことがない。でも、可能性を無視してはいけない。俺たちは、デカだからな」

出口巡査長の死が自殺と仮定することもできるが、沢富は、殺害という可能性を捨て去ってはいけないように思えた。まだ、死の真相ははっきりしていない。密輸に絡んだ殺害ということだとして考えられる。「何事も、決めつけるのはよくないですね。今のところ手掛かりがないわけですから、いろんな可能性を考えてみましょう。でも、意外と、失恋による自殺だったという結末もあり得ますけど」伊達は、麻薬の密輸に絡んだ殺害というより、むしろ、失恋による自殺であってほしかった。正義感の強い青年警察官が、人間の屑のようなヤクザに殺害されたと思うと悲しくてやるせなかった。「失恋か？ そうだ。ひろ子さん、言ってたよな。出口巡査長は幼馴染で、高校のクラスメイトだったと。ホッホー、意外や、意外、なんと、彼の失恋の相手とは、ひろ子さんだった。ひろ子さんに失恋して、自殺した？ あり得るんじゃないか？」

沢富は、口をとがらかせて反論した。「ちょっと待ってください。それはないでしょう。僕は、ひろ子さんと結婚する身なんですよ。冗談にもほどがあります。そんな、縁起の悪い憶測はやめてください」伊達は、冗談のつもりで話し始めたが、もしかしたら、これこそ、真実ではないかと思え始めた。目を輝かせた伊達は話を続けた。「女性の過去というものは、ミステリアスなものなんだ。あんなに出口巡査長の死について関心があるということは、間違いなく、出口巡査長は、元カレだ。きっと、元カレの仇をとる気なんだ。そう考えれば、ひろ子さんの行動につじつまが合う。間違いはない」疑うのが刑事だからといっても、ここまで相棒を傷つけるとは心外だった。「先輩、やめてください。そこまで言うんだったら、確かめてみます。まったく、人が悪いんだから」

伊達の元カレ妄想は急激に膨らみ始めた。「きっと、そうだ。ひろ子命の出口は、高校時代から、ひろ子と付き合っていた。そして、卒業後、何度も、プロポーズをしたが、冷たくあしらわれてしまった。さらに悲劇は起きた。ひろ子は、自分よりはるか金持ちのボンボンと結婚した。そのショックで、自殺しようと思ったが、妹に慰められて、どうにか思いとどまった。毎日、ひろ子が離婚しますようにと祈っていたところ、願いが通じたのか、ひろ子は離婚した。そこで、チャンス到来と意気揚々と再度ひろ子にプロポーズした。ところが、またもや、婚約者がいるといわれ、断られた。しかも、その婚約相手というのが、太刀打ちできそうもないキャリアのデカ。二度のプロポーズを断られた彼は、悲しみと絶望で、投身自殺を図った。意外と、これが真実かもしれん。どうだ、サワ」

沢富の開いた口がふさがらなかった。ここまで妄想を膨らませられては、否定しようがなくなってしまった。ひろ子さんとの結婚を祝福しているのか、それとも、ぶち壊したいのか、いったいどちらですかと文句を言いたくなかったが、そこまで言うと大人げないように思えて、グッと怒りを抑えた。「とにかく、今日、ひろ子さんに、確かめます。僕をいじめるような妄想は、やめてください。元カレが何人いたって、僕は、何とも思いません。でも、出口巡査長の自殺と結び付けられたんでは、僕が悪者みたいじゃないですか。先輩、対馬に来て、頭が、ちょっと変になったんじゃないですか」

伊達はなんだか心が開放される思いだった。対馬に飛ばされ、クラブのマスター役を押し付けられ、ここ3ヶ月間話し相手もいず、一人さみしく食事する毎日だった。どんなに対馬赴任をいい方向に考えても、明るい未来は見えなかった。また、出口巡査長の死についても、なんの手掛かりもなく、八方ふさがりだった。こんな時に、出口巡査長の死が殺害でなく、失恋での自殺の可能性が出てきたことになんとかホッとしたのだった。しかも、失恋の相手が、ひろ子と考えると、愉快になってしまった。「そう、むきになるな。男と女というものは、ミステリアスなものだ。ひろ子の隠された過去が暴かれるかもしれんぞ。ワクワクしてきた。あ、もしかしたら、ひろ子、高校時代に、中絶の経験があるかも？父親は、出口巡査長。これは、ますます面白くなってきたぞ」

やはり、一人ぼっちになって、さみしさのあまり、頭がちよっとおかしくなっていると直感した。「ナオ子さんがいなくて、さみしいでしょ。まあ、いいですよ。思う存分、僕をイジッて楽しんでください。そうだ、ここ1年は、対馬暮らしです。対馬といえば？先輩？ほら、あれじゃないですか？」伊達は、なぞかけをされて首をかしげた。「対馬といえば？なんだ？対馬といえば～～？何にもないじゃねえ～～か」沢富が笑顔を作り返事した。「対馬といえば、魚釣り。釣りバカ人生が送れるパラダイスじゃないですか。漁港の岸壁から、アジ、キス、ミズイカなど、ジャンジャン釣れるそうですよ。オバちゃんたちが、晩御飯のおかずにと、夕方になったら、ホイホイ、釣ってるそうです。我々も、行きましょう。仕事なんて、二の次ですよ。人生、くよくよしても始まりません。先輩、ハマちゃんみたいに、釣りでもして、人生、楽しみましょう」

釣りと聞いた伊達の顔に笑顔が浮かんだ。マトリのお世話役を押し付けられ、男の遊び場のないさみしい離島に追いやられたと嘆いていたが、魚釣りという遊びに気づかされ、なんだか肩の荷が下りた心持になった。近年、警察官の博打がらみの不祥事件がマスコミで取り上げられていたため、伊達は競艇やパチンコを控えていた。そのため、ホークスファンの伊達は、ヤフオクドームでの野球観戦が唯一の息抜きとなっていた。ところが、対馬に赴任してからは、簡単にヤフオクドームに行くことができず、休みの日は、やむなく、ユーチューブのサスペンスドラマを見て時間をつぶしていた。沢富がやってきて、野球談話ができるようになったことは、ちょっとした時間つぶしにはなったが、それでも、ヤフオクドームに行けないと思うと切なかった。野球観戦に行くことができなくなってしまった今、魚釣りは救世主のように思え始めた。

そもそも、出世できる学歴を持ち合わせてない身分を考えれば、警察署長への夢はちょっとしたオアシスだったように思えた。対馬で退官を迎えたとしても、自分らしくていいようにも思えた。魂が抜けたような顔つきの伊達は、ぼんやりと天井を見つめつぶやいた。「そうだな～～。釣りか。それもいいかもな。ナオ子と一緒に、対馬で釣りを楽しみながら、余生を送るってのも、いいかも。バカな夢を見続けても、しょうがないしな。よっしゃ、デカなんか、くそくらえだ。釣りバカになってやる」あまりにも大胆な言葉に、沢富は目を丸くしたが、元気を出してくれた伊達を見て、ホッとした。「その意気ですよ。早速、準備しましょう。僕は、新しい釣竿を準備します。釣具屋を探さない」と

老犬介護

午後6時前にひろ子とナオ子は伊達の比田勝トンチャンマンションにやってきた。一月に一度、浮気防止のために二人で伊達のマンションにやってきていたが、沢富が赴任してきてからは、初めてであった。ひろ子は、麻薬探知犬が見つかったと思っていたため、沢富と会うのが待ち遠しかった。テーブルに着いたひろ子は、沢富の元気そうな顔を見てニコッと笑顔を作り、早速、麻薬探知犬の話 시작했다。「サワちゃん、見つかったの？どんな犬。おいぼれでもいいのよ。ちゃんと面倒見るから。その犬って、今どこにいるの？名前は？オス？メス？」またもや、沢富は、ひろ子の意気込みに圧倒されてしまった。

困り果てた顔の沢富を気遣って、即座に、伊達は助け舟を出した。「ひろ子さん、まあ、落ち着いて。サワの話では、その老犬ってのは、人間でいえば70歳以上で、散歩もろくにできないみたいだね。あと、長生きできても、2, 3年ってところだそう。そんな老犬だから、いつ、病気になるかわからないし、今回は、見送ったほうがいいんじゃないかと思うんだが。ちょっと、出しゃばるようだが」水を差されたひろ子は、目を吊り上げて反論した。「そんなことはわかっています。死にかけでも、いいんです。病気したら、病院にもつれていくし、最期まで責任をもって、飼いますから。サワちゃん、お願い。その老犬を譲ってもらってよ。この通り」ひろ子は、顔の前で両手を合わせて頭を下げた。

伊達は、頭を下げてまでして、老犬を欲しがるとはわからなかった。麻薬探知犬であるから、まだ麻薬探知の仕事ができる可能性はあるかもしれないが、死にかけの老犬である。しかも、麻薬探知の仕事は、麻薬探知犬を操るハンドラーがいなくては、やれるものではない。ひろ子は、ハンドラーの経験もないし、今からハンドラーになる訓練をするわけでもない。伊達は、ひろ子がなぜそんなに麻薬探知犬を欲しがるとかの理由を確かめることにした。「ひろ子さん、犬を飼いたいんだったら、かわいい元気な子犬を飼われてはどうですか？老犬の麻薬探知犬を飼って、どうしようって言うんですか？まさか、老犬に麻薬探知の仕事をさせようってんじゃないでしょうね」

ひろ子は、現役を終えた老犬に麻薬探知の仕事を強制する気はなかった。あくまでも、一緒に北署の周りを散歩して、麻薬のにおいに気づいたら、教えてほしかった。「当然です。そんな強制労働を強いるなんて、絶対にしません。政府みたいに、老人を死ぬまで働かせるようなことはいたしません。ただ、一緒に、散歩したいだけです。誠心誠意、お世話しますから、譲ってもらえるように、お願いしてください。この通り」またもや、ひろ子は、両手を合わせてお願いした。その時、ナオ子が、口をはさんだ。「ねえ、犬を飼うって言っても、団地じゃ、飼えないんじゃないの。その老犬って、部屋の中で飼わなければならないでしょ。それに、ひろ子さんがいない間は、だれが面倒見るの？まさか、私に押し付けるってことは、ないわよね」

沢富は、大きくなずいた。その老犬は、体が弱っているため、散歩の後はほとんどリビングで寝ている、と聞かされていたのを思い出した。「そうですよ。元気な犬だったら、外で飼えますけど、老犬なんです。飼い主さんが言われるには、散歩の後は、いつもリビングでゴロンと寝転がって過ごしているそうです。団地内では、飼えないし、ナオ子さんに、迷惑が掛かりますよ。やっぱ、今回は、あきらめたほうが・・・」ひろ子は、老犬を飼ううえでの最大の問題点を解決するためにすでに手を打っていた。「そりゃ～～、老犬なんだから、外に放り出したりしないわよ。ナオ子さんにも、迷惑をかけるようなことはいたしません。ちゃんと飼う場所は、確保しています」三人は、老犬をいったいどこで飼う気なのか興味がわいてきた。ナオ子が、尋ねた。「いったい、どこで飼う気？まさか、車の中、ってことはないわよね」

ハハハと笑い声をあげると返事した。「ナオ子さん、そんな極悪非道な女に見える？実家で飼うんです。父は、今、仕事ができずに、毎日、退屈してるんです。だから、私がいけない間は、父が面倒を見てくれます。父は、犬が大好きなんです。犬がやってくるのを心待ちにしているぐらいです。これで、問題ないでしょ」沢富は、ここまで用意周到だとは思わなかった。このままだと、押し切られてしまうような不安に駆られた。何か、あきらめさせる方法はないものかと必死に考えたが、名案が浮かばなかった。伊達も必死に考えているようで、首を左右にかしげながら頭をかいていた。

ナオ子は、ちゃんと面倒を見る人がいるなら、特に問題はないように思えた。眉を八の字にした沢富に、ナオ子は声をかけた。「一度、今の飼い主さんに、お会いさせてもらえないの。こんなに、ひろ子さんが、お願いしてるんだから。きっと、わかってもらえると思うんだけど」譲り受けるからには、当然、責任が付きまとう。老犬だから、いつ病気になるかわからない。万が一、早死にでもさせたら、今の飼い主に、何と言ってお詫びをすればいいものか。飼い主が手放したくないと言ってくれると一番いいのだが、まずいことに、一度、飼い主の福山宅に伺った時、譲ってもいいような口ぶりだった。ここまで、話が進んでは、一度ひろ子に老犬を会わせて、相性を見てみることにした。「そうですか。そこまで、準備されているんですか。でも、犬を飼うには、飼い主と犬との相性というものがあるんです。もし、お見合いをして、老犬に嫌われたら、譲り受けることはできません。それでも、会ってみたいといわれるならば、先方に、連絡を取ってみます。会われますか？」

ひろ子は、笑顔で身を乗り出した。「あ～～、一刻も早く会いたい。その犬って、シェパード？オス？メス？名前は？」気乗りしなかったが、返事した。「シェパードじゃありません。オスのビーグル犬で、名前は、ビヨンド号です。現役の時は、とても優秀で、何度も表彰された名犬だそうです。ここまで、老犬にこだわるのであれば、連絡を取ってみます。でも、飼い主が、譲ってくれるとは限りませんよ。そのことは、了解しててください」ひろ子の頭には、耳が垂れたかわいいビーグル犬の顔がくっきりと浮かんでいた。「もちろんよ。強引なお願いは、しないわ。誠心誠意、ビヨンド号にお願いする。きっと、わかってくれると思う。ぜひ、連絡を取って」

ついに押し切られたかと観念した沢富は、明日の午前中に連絡することにした。「それじゃ、明日、連絡してみるよ」ひろ子は、身を乗り出して、即座に返事した。「え、今、連絡取れないの？日曜日だから、飼い主さん、家にいるんじゃない。電話してみて」全くせつかなんだからと心でつぶやき、内ポケットからスマホを取り出した。右手の人差し指で福山宅にタッチすると、二回の呼び出しで応答があった。「こんばんわ。先日お伺い、いたしました、沢富です。今、お電話よろしいでしょうか？」福山は、即座に返事した。「はい。どうぞ」沢富は、電話でお願いするのは、少し気が引けたが、思い切ってお願いすることにした。「先日のビヨンド号の件なのですが、口森さんという方が、ビヨンド号に会わせてもらえないかといわれてまして、どうでしょうか？」

いい方がいれば譲ってもいいと思っていた福山は、快く返事した。「どうぞ、どうぞ。いつでもどうぞ。どちらから、いらっしゃいますか？」沢富は、小声でひろ子に確認した。「ひろ子さん、いつでもいいですよ。改めて、電話しましょうか？」ひろ子は、即座に返事した。「来週の日曜日はどうか、聞いてみて」沢富は、福山さんに返事した。「対馬からうかがうんですが、来週の日曜日は、いかがでしょう？」福山は、快く承諾した。「よろしいですよ。来週の日曜日ですね。何時に来られても、結構ですから、気を付けて、いらしてください。お待ちしております」沢富は親指と人差し指で作ったOKサインをひろ子に見せると、別れの挨拶をした。「ありがとうございます。来週、日曜日、14日の午後1時ごろ伺います。それでは、失礼いたします」

来週会えるとわかったひろ子は、沢富に感謝した。「サワちゃん、ありがとう。サワちゃんも、一緒に行ってくれるのよね」心では乗り気ではなかったが、しぶしぶ了解の返事をした。「お願いしたのは、僕だから、一緒に行きます。でも、犬との相性がありますから、あくまでも、強引なお願いは、しないでください。飼い主は福山さんといわれる方で、長崎県警の元刑事です。すごく動物が好きな方で、ビーグル犬以外にチワワ、柴犬、まだいたな～、三毛猫と九官鳥もいたような。とにかく、にぎやかな家なんです」ペットが一匹だと、手放すとなれば飼い主はさみしくなるから、手放すのを渋るといったが、ほかに犬猫がいれば、譲ってくれそうに思えた。

ひろ子は、出口の仇打ちが一步前進したような気がして、気合がみなぎってきた。たとえ老犬であっても、全く麻薬のにおいを忘れてしまったとは、考えられなかった。きっと、少しでも麻薬の匂いがすれば、反応してくれると信じたかった。出口が残した手紙には、上司の車で麻薬を運んだと書いてあった。となれば、北署の駐車場に麻薬が積み込まれた車がやってくる時、きっと来ると考えた。いつやってくるかはわからないから、毎朝、北署の駐車場を散歩することにしたのだった。雲をつかむような捜査だと思ったが、自分でやることを実行する以外になかった。老犬ビヨンド号には、気の毒だと思ったが、事情を話して、心からお願いすれば、きっとわかってくれるように思えた。その代わり、ビヨンド号が健康で、長生きできるように、できる限りの老犬介護をするつもりでいた。

沢富は、今でも、老犬を飼うことには賛成できなかった。でも、喜んでいるひろ子を見ていると老犬の病気の心配をするより、老犬の介護を真剣に考えるべきではないかと思えてきた。元気な犬はかわいがって、よぼよぼの老犬はかわいがりたくないと思っている自分が、なんだか恥ずかしくなった。よぼよぼのジ～さんになっても、かつては、国家のために働き、人をいやしてくれたかわいいペット。そんなことを思っていると、ひよっとしたら、麻薬探知に役立つかもしれない、とよからぬことを思ってしまった。というのも、ビヨンド号を連れて、警部のうちに遊びに行っただろうか、と考えたからだ。「ひろ子さん、譲ってもらえるといいですね。もし、譲ってもらえたら、僕もかわいかりますよ」

あれほど反対していた沢富の心変わりに、伊達は皮肉を言った。「さっきまで、飼うのを反対してたのに、どういう風の吹き回しだ。結婚前から、尻に敷かれるようじゃ、先が思いやられるな～～、ハハハ」皮肉を言われたが、なんとなく、老犬が事件の解決に活躍してくれそうな予感がした。「先輩、そう、からかわないでください。老犬介護も、老人介護と同じように、大切だっただけですよ。ペットを飼うんだったら、最期まで面倒見てやるのが、ヒューマニズムじゃないかと思ひましてね」伊達が、顔をしかめて、さらに皮肉を言った。「何が、ヒューマニズムだ。出世のことしか考えてなくせに。エリートというやつは、口だけは、達者だからな」

左遷されてかなりひがみっぽくなってしまったと沢富はあきれてしまった。でも、出世の道のない地方公務員の刑事から見れば、キャリアは、妬みの対象でしかないのだろう。正義のため、庶民の安全のため、と大義名分を並べ立てたとしても、ヒラ公務員で一生を終えなければならないと思うとみじめだろう。しかも、どんなに事件解決の実績を上げて、それは、当然の任務であり、出世の評価には値しない。さらに、家族を守るために、若いキャリアにペコペコ頭を下げなければならないという宿命までも背負わされている。おそらく、今のままでは、伊達の警察署長は、夢で終わるだろう。伊達は、そのことを悟っているに違いない。今、自分の生きがいを見つけ出そうと必死に、もがいてるのかもしれない。組織というものは、非情なものだと思うが、生きるということは、その人の創造でしかない。必ず、その人なりの未来は創造できるはず。

ナオ子是对馬に左遷された伊達の落ち込んだ気持ちを察していた。しかも、唯一の息抜きにしていたヤフオクドームでの野球観戦もできなくなって、不満のはけ口を失っていることも読み取れた。また、ナオ子に対馬の田舎暮らしをさせたことへの負い目を感じていることも直感できた。一方、ナオ子自身の気持ちとしては、対馬に来る前は、社会から脱落してしまうようで絶望感に陥ったが、いざ、対馬に住んでみると、都会生活では経験できなかったやさしい心を持つようになったと感じた。世間の噂ばかりを気にして生きてきた人生が、なんだか味気なく感じてしまった。

また、対馬には、農業や漁業を体験できる農泊というのがあることを知った。試しにと、3月に、ひろ子と二人で農泊に出かけた。ナオ子は、初めて農業と漁業に触れて、人生が一変するほどの感動を覚えた。自然と直接触れ合う農作業によって得られる充実感は、今までに味わったことのない心地よい気持ちをもたらしてくれた。ナオ子は、今の心境を伊達に伝えることにした。「あなた、ちょっと聞いてよ。この前ね～、ひろ子さんと二人で、農泊に行ってきたのよ。農泊って、農業とか漁業を体験できる小旅行なの。すっごく楽しかった。対馬が、こんなに素晴らしいところだとは、思わなかったわ。今度は、みんなで、農泊に行きましょうよ。あなたが好きな船釣りができるのよ。対馬だったら、何年いたって、いいって感じ。住めば都、ってよく言ったものね。対馬は、最高」

ひろ子への尋問

ナオ子が対馬を気に入ってくれたことで、少しは伊達の気持ちは楽になったが、伊達にしてみれば、対馬の釣りより博多の屋台が恋しかった。博多に戻るためにも、一刻も早く、麻薬密輸ルートを摘発しなければならなかった。できることなら、出口巡査長の死の謎をも解明したかった。「ひろ子さん、話は変わるけど、出口巡査長とは高校のクラスメイトだったんだろ。ちょっと、彼の死が気になるんだ。彼について、聞かせてくれないか？なんでもいいんだ」ひろ子は、出口巡査長の死に疑問を持ってきている警察官がひとりでもいると知ると、犬死した出口巡査長が浮かばれるように思えた。でも、出口巡査長が神への懺悔として残した手紙の内容を決して他言しない、とドギャン・シタトネ神父と交わした約束をひろ子は破るわけにはいかなかった。

伊達は出口巡査長の経歴と家族構成を調べると同時にひろ子の過去も調べていた。ひろ子は上対馬高校卒業後、対馬南警察署に採用され、3年間の交通課勤務後、21歳の時に結婚を理由に退職。その後、23歳で離婚すると、福岡に転居し、タクシー運転手として勤務。なぜ、ひろ子は警察官であったことを隠していたのか？退職理由は、結婚とあったが、果たして、それは本当なのか？伊達は、ひろ子の過去を探りたくなかったが、出口巡査長の死を解明するためにはやむを得ないと心を鬼にした。伊達は、黙っているひろ子に取調室で被疑者を尋問するような口調で話しかけた。「なんでもいいんだ。ひろ子さん、話してくれないか？手掛かりが欲しいんだ。付き合っていた時も、あったんじゃないのか？」

黙っていると伊達の心証を悪くすると思い、当たり障りない程度のことを話すことにした。「出口君とは、幼馴染で、高校のクラスメイトよ。単なる友達。出口君とは、3年前の同窓会以来、会ってないし、突然の死で、びっくりしてるんだから。こっちのほうが、知りたいぐらい」伊達は、腕組みをしてうなずいたが、長年の刑事の感から、何か隠していると直感した。「それだけですか？ほかに、何か、つかんでるんじゃないですか？ひろ子さんには、悪いと思ったが、ちょっと、調べさせてもらった。ひろさんは、かつて、対馬南署の警察官だったんですね」沢富とナオ子は、え〜〜、と大声をあげて、驚いた。沢富が確認した。「本当ですか？ひろ子さん」

ひろ子は隠すつもりはなかったが、自ら知らせることでもないと思っていた。「別に、隠すつもりじゃ。なんとなく、言いそびれたというか、何というか・・・まあ、そんなこと、どうでもいいじゃないですか。わかりました。とにかく、出口君のことで、何かわかったことがあれば、必ず、伊達さんに報告します。黙ってたことは、ごめんなさい。サワちゃん、ごめんね」沢富は、納得いかない顔で返事した。「水臭いじゃないですか。僕に隠し事するなんて。出口巡査長との関係も、洗いざらい白状してください。どんなことを言われても、驚かないから」出口巡査長との関係を疑われたひろ子は、面食らってしまった。「何、言うの。出口君とは、高校の単なるクラスメイトよ。それ以上の関係はないわよ。変な勘繰りはやめてよ。まったく、これだから、デカって、嫌いなのよ」

肝っ玉の小さい沢富に、ナオ子はあきれた。女に一つや二つの隠し事は、あって当たり前、何もかも過去をばらせば、結婚なんてできっこない、と沢富に説教してやろうかと喉元まで声が出かかったが、これ以上二人の仲が険悪になっては、仲人が水の泡になると思い、グッと口をつぐんだ。「サワちゃん、そう、むきにならずに。ひろ子さんだって、悪気はなかったんだから。サワちゃん、結婚というのは、相手のすべてを信じることなの。ひろ子さんを信じてあげて」興奮が収まらなかったが、大人げない発言をしたことは、謝るべきだと感じた。「いや、僕って、バカですね。ひろ子さんを疑うなんて。とにかく、出口巡査長について、力を合わせて、調べてみましょう。きっと、手掛かりがつかめるはずですよ。本当に、申し訳ありませんでした」

頭を下げて謝った沢富が気の毒になった。ひろ子は、隠し事をしていることに罪悪感を感じたが、死の謎が解決するまでは、懺悔の内容はしゃべることができなかった。沢富に笑顔を送ったひろ子は、そっと、心の底でごめんなさいと謝った。「サワちゃん、謝るのは、私の方よ。隠し事して、本当に、ごめんなさい。これからは、包み隠さず、話すから。出口君のことなんだけど、友達が言うには、職場での人間関係がうまくいなくて、自殺したんじゃないかって。でも、出口君らしくないのよね～～。出口君は、野球部のキャプテンだったし、卒業してからも後輩たちの面倒を見てたらしいの。事故死する数日前まで、バッティングピッチャーやってたんだって。武田監督も、首をかしげていたのよ」

伊達が、大きな声で問い詰めた。「ひろ子さん、調べてるじゃないですか。知ってることは、すべて、話してもらわないと。まったく」伊達は、ひろ子がしゃべったことをメモするように沢富に指示した。「サワ、今のをメモれ。ほかに、わかってることは？すでに、聞き込みをやってるんでしょ。包み隠さず、話してください。今、約束したでしょ」ひろ子は武田先生の話の思い出してみた。「そう、出口君、何か、悩んでたみたいだって。武田監督が言ってた」沢富が、即座に口をはさんだ。「悩んでいたんですね。仕事の悩みでしょうか？仕事の悩みで、自殺ってことも。う〜〜」伊達が、話を促した。「そのほかには？さ〜、全部、吐き出して」ひろ子は、首をかしげながらあの時のことを思い出してみた。「あ、そう、練習の帰り際に、武田監督が、また、頼むな、って言ったのよ。そしたら、出口君、ハイって答えたんだって」

伊達は、出口巡査長には、母親と妹がいたことを思い出した。すでに、ひろ子が二人にも聞き込みをしたのではないかと思い、誘導尋問をした。「そのほかには？母親にも会ったんじゃないのか？」母親から、特に手掛かりになるような情報を得られなかったが、母親が言った気になったことを話すことにした。「はい。一度、会いました。お母さんも自殺かもしれないといっておられました。そう、出口君から電話があった時に、困ったことが起きた、と言っていたそうです。内容について聞き出そうとされたんですが、出口君は、話さなかったそうです”悩んでいた”、”困ったことが起きた”、”と言った言葉から、伊達の頭は自殺説が濃厚になっていた。さらに、伊達は話を促した。「妹は、何と言った？」妹とは会っていなかったひろ子は、即位座に返事した。「妹さんには、一度もあっていません」

メモを書き終えた沢富も自殺説に偏り始めていたが、何か、しっくりいかなかった。確かに、何か事件が起きて、そのことで悩んでいたことは、ひろ子の話から推測できた。だからといって、自殺したと決めつけるのは、あまりにも短絡的すぎると思った。伊達は、かなり聞き込みをやっていることに感心したが、万が一、出口巡査長の死が殺害であったならば、非常に危険な聞き込みをやっていることになるかと不安になった。彼の殺害に麻薬密輸マフィアが絡んでいたならば、お金で殺しを請け負うプロのヒットマンが殺害したと考えていい。今回の任務で最も警戒しなければならない相手は、プロのヒットマンなのだ。これ以上、ひろ子に聞き込みをさせることは危険極まりないと判断した。

伊達の顔は少し紅潮していた。出口巡査長の死で特に気になっていたことは、警察が、事件を深く調査しようとせず、事故死と断定し、即座に、捜査を打ち切ったことだ。確かに、殺害されたと思われる外傷はなく、殺害現場の目撃者も現れていないため、殺害とするに至る物的証拠も状況証拠もない。だから、事故死と考えても、何ら問題はない。だが、対馬育ちで、対馬の地理に詳しく、身体的能力も備えている青年に、どんな事故が起きたというのか？こういう疑問が起きると、対馬の人たちが自殺と考えてしまうのもうなずけるのだ。伊達も、その疑問にぶつかり、自殺説に偏ってしまった。

これ以上、ひろ子に危険な聞き込みをさせないために、伊達は自殺説を強調することにした。「ひろ子さんのお話からすると、気の毒だけど、どうも、自殺のようですね。お友達が言われているように、職場での人間関係で、悩まれていたんじゃないですかね～。彼は、正義感が強く、まじめで、頑固だったんじゃないでしょうか。往々にして、こういう青年は、協調性に欠けるんですよ。また、相談する相手もいなかったようですから、思い余って、衝動的に、投身自殺を図ったのかもしれない。まったく、残念です」

自殺説を強調した伊達の意見を聴いて、沢富に疑問が起きた。「確かに、ひろ子さんの話からすれば、悩みを解決できず、衝動的に自殺したように思えます。もしそうであっても、全く誰にも悩みを相談しなかったとは考えられません。きっと、誰かに相談したと思います。相談する相手は、恋人か？もしくは、妹ではないでしょうか？彼に、恋人はいたのでしょうか？ひろ子さん、心当たりはありませんか？」当初、ひろ子も沢富と同じことを考えていた。だから、母親に聞き込みをしたのだった。次に、妹にも聞き込みをしようと思っていた矢先、ドギャン・シタトネ神父から懺悔の手紙を読まされたのだった。「恋人のことは、わかりません。もしかしたら、妹さんに相談していたかもしれませんね。私は、まだ、会ったことはないんですが」

沢富は、恋人よりも妹に何か相談しているような予感がした。妹の所在が分かれば、早速、聞き込みに入りたくなった。「妹さんの所在は、わかりますか？」ひろ子は、住所までは知らなかった。母親に尋ねればわかると思い返事した。「お母さんに聞けば、わかるんじゃない。聞いてみましょうか？」沢富が、依頼の返事をしようと身構えたとたん、伊達が、右手を差し出して遮った。「ひろ子さん、これ以上、聞き込みはしないように。聞き込みは、こちらでやる。サワ、お前が、やれ。いいな」沢富は、うなずき返事した。「わかりました。それじゃ、お母さんの住所と電話番号を教えてください」

ひろ子にはまだまだ隠していることがあると勘繰った伊達は、強い口調で質問を続けた。「ひろ子さんは、出口巡査長と同じくして、警察官になっていますね。二人は、そのころから、情報交換をしていたでしょう。ならば、ひろ子さんに、何か伝えていたと思うんですが、どうですか？」さすがベテラン敏腕刑事だとひろ子は思った。ちょっと表情を硬くしてしまい、見破られたかもしれないと思ったが、気持ちを落ち着かせ冷静に答えた。「3年前にクラス同窓会で会って以来、連絡は取っていません。だから、妹さんに会って、話を聞こうと思っていたんです。どうしても、出口君の死の真相を知りたくて」伊達は、一瞬の表情を見逃さなかった。間違いなく、何か隠していると確信した。でも、問い詰めても話さないと判断した。というのは、クリスチャンとしての信仰が原因だと直感したからだった。

ひろ子は、出口巡査長の死の真相を知りたいはず。ならば、我々には、協力すると考えられる。にもかかわらず、隠し通すとなれば、話すことによって、誰かが不利益になるか？宗教的なことだと思えた。おそらく、伊達は、後者と判断した。「ひろ子さんは、クリスチャンですね。また、出口巡査長もクリスチャンだった。カトリックのことは、わかりません。ひろ子さんは、出口巡査長の恋人ではなかったでしょう。でも、クリスチャンとしての親友だったんじゃないですか？ひろ子さんを疑うわけじゃありませんが、出口巡査長は何か死にかかわるメッセージを残していたんじゃないですか？遺書みたいなものを。死の真相を解明するには、我々は、事実を知らなければならない。包み隠さず、話してもらえますか？」

ひろ子は、伊達の直感には驚いた。ここまで踏み込んで尋問されるとひろ子も一瞬固まってしまった。でも、クリスチャンとして、懺悔の内容は、どんな拷問にあっても、話すわけにはいかなかった。マジな表情できっぱりと返事した。「今、言ったように、出口君とは、ここ3年間、まったく、連絡を取っていません。知ってることは、すべて話しました。まだ、疑うんですか？」沢富は、ひろ子が容疑者扱いされているようで、気の毒になってきた。沢富もひろ子は何か隠していると直感したが、ひろ子の気持ちを大切にしたいと思った。「僕は、ひろ子さんを信じています。僕が、きっと、真相を暴いて見せます。任せてください。だから、ひろ子さんは、無駄なことをしないでください。いいですね」沢富も伊達と同じく、出口巡査長の死が麻薬密輸に絡んでいたとしたならば、非常に危険だと判断した。しかも、警察が絡んでいたならば、間違いなく、消されると思った。

伊達は、これ以上ひろ子を追い詰めないことにした。むしろ、事件に首を突っ込まないように念を押すことにした。「ひろ子さんの気持ちは、よくわかります。でも、事件を解決するのは、警察の仕事です。ひろ子さんが、元警察官だからといって、動き回られては、こちらが迷惑なのです。江戸時代じゃないんです、仇打ち、みたいなマネは決してしないように。いいですね」横で心配そうな表情で話に聞き入っていたナオ子が、口をはさんだ。「そうよ。ひろ子さん、事件は、警察に任せればいいの。サワちゃんもあなたも、事件のことなんか、どうでもいいのよ。1年間、無事に、対馬での任務を終えれば、晴れて、二人は結婚式があげられるんだから。わかった」

ナオ子の頭にあるのは、結婚式と仲人のことだけだった。ナオ子の無責任な発言に伊達はムカついたが、結婚を控えているひろ子のことを考えれば、この場では妥当な発言だと判断した。「まあ、そうだな。二人は、来年、結婚だ。とにかく、サワは、無事に対馬の任務を終えることだ。俺たちも、二人の仲人を楽しみにしてる。まあ、出口巡査長の死は気の毒に思うが、やはり、事件性はないと思っている。また、今回の対馬赴任は、出口巡査長に関する任務ではない。あくまでも、マトリへの協力だ。麻薬密輸ルートを摘発できなかったからといって、俺たちの汚点にはならん。この1年、対馬生活を楽しくもうじゃないか。なあ、サワ」

ナオ子が、即座に賛同の声をあげた。「そうよ。対馬を満喫しなくっちゃ。いい思い出を作って、来年は、結婚式。あなた、ひろ子さんのご両親に、ご挨拶しなくては。いつ、お伺いしようかしら。ひろ子さん、ご両親の都合、聞いてくださらない？」ひろ子は、麻薬探知犬のことばかり考えて、自分の結婚式のことを頭から抜けていた。「そうだった。来年、結婚よね。結婚式は、東京でやるのよね。サワちゃん」沢富もその予定だった。「ひろ子さんが、東京でいいというのなら、僕は構わない。東京であれば、1年前から予約しないと。式場のことは、両親に頼んだほうがいいのかもしれない」式場の件は沢富に任せることにして、早速、ひろ子は伊達夫妻の紹介の日取りを決めることにした。「母も仲人さんにお会いしたいと言っていました。早速、都合を聞いてみます。日取りがわかり次第、報告します」

妹の執念

対馬に赴任してきて以来、伊達はクラブ・アリランの切り盛りをママに任せていた。その代わり、ほとんどの時間、2階事務所の5つのモニターTVとにらめっこしながら、お客の人相を確かめていた。防犯カメラは店外に2台、店内に3台設置してあった。また、毎週、店休日の月曜日に、マトリの鹿取、草風たちとの打ち合わせもここで行っていた。お客が少ない8時から9時までは、事務所でママとミーティングしていた。伊達は2階に上がってきたママに現況を確認した。「特に変わった客は？」ママは即座に返事した。「特に、これといったお客は、ありませんが、新人ホステスが入りました。瑞恵（みずえ）って子なんだけど、今時には、バカに気合が入った子です」伊達は、気合が入った子と聞いて、なんだか興味がわいた。「へ～～、気合が入った子ね～～。対馬には、働き口が少ないから、精一杯、クビにならないように頑張るってことだろうね」

ママは、小さな笑い声をあげて返事した。「それが、真面目というか、郷土愛があるというのか、瑞恵って、面白いこと言うんです。面接のときに言ったことが、笑っちゃいけないと思って我慢したんだけど、つい噴き出しちゃった。あの子ね、対馬を守るために、命を懸けて働きます。全力で、頑張ります。ぜひ、雇ってください、って言ったの。かわいいし、愛想もよかったから、早速働いてもらってるんだけど、普通、面接で、命がけで働きます、なんて言いますか？それで、頑張ってもらうのは、結構だけど、無理はしなくていいのよ。命がけで働くようなところじゃないから、って言ったら。あの子ったら、いえ、今、対馬は危機に立たされているんです。犯罪の街にならないためにも、対馬のために、戻ってきたんです、って。ちょっと、返答に困ってしまいました」

伊達の顔にも苦笑いが浮かんでいた。婦人警官になるための面接だったら、わからなくもなかったが、ホステス採用の面接に”命がけで”とか言うような子は、どんな子だろうかと興味がわいた。「それは、面白い子だね。婦人警官にでも、なりたかったんじゃないか？戻ってきたって、どこから戻ってきたんだろうね」ママは、返事した。「あの子、2月まで、博多の中洲で働いていたらしくて、家庭の事情で、対馬に戻ってきたそうなの。でも、さすが、中洲の一流クラブのホステスだけあって、礼儀正しく、おしゃべりも上手で、お客の対応も、手慣れたものよ。歌も、プロかと思うぐらい、上手。高級クラブ並みのお給料は出せないけど、いいかしら？って聞いたら、いくらでもいいんです、って。こちらにとっては、棚から牡丹餅よ」

中洲と聞いた伊達の頭の中に、即座に、中洲のネオンが輝き始めた。伊達は、すぐにでも、その子に会いたくなかった。「ママ、瑞恵って子、今日、入ってるの？」ママは、即座に返事した。「入ってるわよ、9時出勤だから、もうしばらくしたら、顔を出すんじゃないかしら」瑞恵は、8時40分過ぎに店に入ってきた。ママは、瑞恵の顔を見るなり声をかけた。「マスターが会いたいんだって、ちょっと、2階の事務所に上がって」急いで階段を駆け上がった瑞恵ではあったが、事務所のドアの前にたってノックをしようとした時、突然、強面の浅黒い顔が頭に現れ、一瞬、右手がとまった。緊張した瑞恵は、大きく深呼吸してドアをゆっくり2回、コンコンとノックした。ドアに口を近づけて小さな声を発した。「瑞恵です」伊達は、大きな声で即座に返事した。「どうぞ、入ってください」瑞恵は、ゆっくりドアを開けて、中を覗き込んだ。小太りで、眼鏡をかけた色白のマスターを見て、ちょっとホッとした。

ニコッと笑顔を作った伊達は、即座に、声をかけた。「さあ、こちらにどうぞ」即座に立ち上がった伊達は、丸テーブルの椅子を引いて、腰掛けるように案内した。瑞恵は、モニター室が珍しと見えて、キョロキョロとあたりを見回してゆっくりと腰を下ろした。伊達は、柔らかい口調で話しかけた。「中洲で働いていたそうですね。ママから聞きしました。頑張ってください」若干硬くなった瑞恵は、小さくうなずいて返事した。「はい。頑張ります。どうぞよろしく願います」伊達は、ママから聞いた面接での瑞恵の話を思い出し、質問してみたくなった。「生まれは、対馬なんですね。家庭の事情で、戻ってこられたとか」

瑞恵は、家族のことは話したくなかったが、やさしそうなマスターには、話してもいいように思えた。「はい、母の面倒を見なくては、いけませんので。今、頑張って、貯金しておこうと思っています。頑張ります」伊達は、二人っきりの母子家庭ではないかと思った。「そうですか。頑張っていただけるのは、結構なことですが、あまり無理はしないように。瑞恵さんが、病気にでもなったら、それこそ、責任者の私が困りますから」小さくうなずいた瑞恵は、マスターにしてはやさしい人だと思った。また、話の口調から対馬の人でないと直感した。「マスターは、対馬の方じゃ、ありませんよね」伊達は、笑顔で返事した。「わかりますか。福岡です。私も、今年から、対馬で働いているんです。対馬のことはさっぱりわかりません。いろいろと教えてください」

福岡から孤島の対馬に働きに来る人は、何か、訳ありの人だと思えた。でも、垢抜けしたやさしそうなマスターの顔を見ていると、気持ちがほっこりして、心が許せるような人のように思えた。「対馬のことだったら、何でも聞いてください。対馬は、風光明媚な観光地で、毎年、約40万人の観光客がやってきます。そのほとんどは、韓国人なんですが、重大な問題が起きているんです。対馬の土地や不動産が、韓国に買収されているんです。さらに、韓国人経営のホテルや民宿も増えています。でも、政府は何の対策もしないんです。このままいけば、対馬は、韓国領になってしまうかもしれません。悔しいたら、ありやしない」瑞恵は、両手に握りこぶしを作っていた。

ママが言っていた通り、ちょっと変わった子だと思った。郷土愛があるのはわかるが、ここまで郷土を真剣に考えるホステスがいることにびっくりした。また、真剣なまなざしと几帳面な話し方から、もしかしたら、父親が警察官だったのではないかと思えた。「瑞恵さんは、郷土愛があるんですね。確かに、韓国人観光客が毎年増加し、トラブルも増えていると聞いています。ところで、すごくしっかりしたお話をされますが、お父様が、警察官だったとか？」瑞恵は、ちょっと余計なことを話しすぎたと後悔した。マスターは、ママから面接で話したことを聴いていたに違いないと直感した。引っ込みがつかなくなった瑞恵は、家族のことを話すことにした。「いえ、父親は、漁師でした。でも、兄は、正義感が強く、対馬を守ることに命を懸けていました」

二人っきりの母子家庭だと思っていたが、兄がいたことに驚いた。「あ、お兄さんがいらしたのですね。もしかして、お兄さんが？」ゆっくりうなずいた瑞恵は、小さな声で返事した。「はい、兄は、警察官でした」即座に、伊達は出口巡査長には妹がいたことを思い出した。兄というのは、出口巡査長ではないかと思い、念のため、確認してみることにした。「もしかして、お兄さんというのは、出口巡査長では？」目を見開いてマスターを見つめた瑞恵は、グイっと身を乗り出し、問い詰めるように質問した。「え、どうして、兄の名前を。兄のお知り合いの方ですか？兄について、何かご存知なんですか？」

一瞬身を引いた伊達は、苦笑いしながら弁解した。「いや、ほら、昨年、若い警察官の事故死が、ニュースになったでしょ。そのことが頭にあって。それで、もしかしたらと思って。そうだったんですか。あなたは、妹さんでしたか」伊達は、あまりの奇遇に度肝を抜かれた。出口巡査長の妹に会えたことは、情報収集において幸運だと思えたが、身分を明かし、極秘捜査をやっていることを話すわけにはいかなかった。一方、瑞恵は兄を知っている人に会えたことに運命的なものを感じ、もしかしたら、何か手掛かりが得られるのではないかと思った。瑞恵は兄の事故死を疑っていた。万が一、自殺だったら、その理由を知りたかった。また、殺害されたのだったら、仇を取りたかった。「マスター、本当は、兄のことを知っているんじゃないですか？なんでもいいんです。知ってることがあったら、教えてください。お願いします」真剣な目つきになった瑞恵は、コックンと頭を下げた。

伊達は、苦虫をつぶしたような表情で、腕組みをした。刑事であることを明かし、妹の瑞恵に協力してもらえれば、出口巡査長の事故死の捜査は進展する。だが、彼女を危険にさらすことにもなる。どうすべきか、苦渋の決断を迫られた。ゆっくりと顔を持ち上げた瑞恵は、マジな顔つきで質問した。「もしかして、目撃者ではありませんか？事故現場の？」不意打ちを食らった伊達は、びっくりして跳び上がってしまった。瑞恵は、兄の死の真相を必死に探っていると直感した。このまま黙っていても、瑞恵にますます誤解されてしまうと不安になった。「いや、本当に知らないんですよ。瑞恵さんは、お兄さんの事故死に、疑問を持たれているんですか？事故死ではないというような、何か、証拠でも？」

瑞恵には、なんの手掛かりもなかった。でも、事故死と考えた場合、いったいどんな事故が兄を死に至らしめたのか、全く想像できなかった。「高校では、野球部のキャプテンで、ピッチャーだったんです。しかも、対馬の地理は、知り尽くしていました。そんな兄が、どうして事故死するんですか？考えられないんです」あまりにももったもな話に言い返す言葉が浮かばなかった。伊達も事故死とは考えられなかった。やはり、自殺ではないかと思った。「そうですか。野球部のキャプテンをね。そうですよね、島育ちですよね。ところで、お兄さんがなくなれる前に、何か、悩みを打ち明けられたってことはありませんか？」

うつむいていた瑞恵は、ヒョイト身を起こし、尋ねた。「どういう意味ですか？何か、悩みがあって、自殺したって、ことですか？兄とはメールのやり取りはしていましたが、悩みがあるような様子ではありませんでした。でも、悩みがあったのかもしれませんが。一人で抱え込まずに、話してくれたらよかったのに。本当に、生真面目なんです。まさか、自殺？いや、絶対、違う。お兄ちゃんは、そんな、やわじゃないんです。自殺なんかしません」瑞恵の話からでは兄の死亡前の状況についてつかめない。今の段階では、やはり、事故死なのか？自殺なのか？殺害なのか？見当がつかなかった。「瑞恵さんのお気持ちは、よくわかります。でも、お兄さんのことは、警察に任せられてはどうですか。警察も必死に捜査してると思いますよ」

突然、目を吊り上げた瑞恵は、甲高い声で反論した。「警察がですか。どこが必死にですか。すぐに、ニュースで事故死といったじゃないですか。捜査なんか、やってないはずですよ。警察に、頼る気はありません。自分の手で、仇を取ります」やはり、不吉な予感が当たったと気が重くなった。「瑞恵さん、仇打ち何て。まだ、殺害されたと断定されたわけじゃないんです。そう、はやらずに」自分の気持ちはだれにもわかってもらえないと思った瑞恵は、肩を落としがっかりした表情で返事した。「突然、兄が死んで、頭がちよっとおかしくなってるんです。自分勝手なことを言って、申し訳ありませんでした。マスターには、関係ないことです。今の話は、忘れてください」

瑞恵の仇と言う言葉が頭から離れなかった。ますます、不吉な予感が膨らんでいった。このまま放っておいたら、危険な聞き込みをやってしまうようで、心配になった。瑞恵は、警察を信用してないだけでなく、頼る気もない。伊達は、警察を信用してもらえるように、自分の身分を明かし、説得すべきか判断に迷った。しばらく迷った挙句、やはり、瑞恵を危険にさらすわけにはいかないと腹をくくった。伊達は、瑞恵の覚悟を確認することにした。「瑞恵さんの気持ちはわかりました。出口巡査長の死は、いまだ、謎です。殺害とする証拠もなければ、目撃者も現れていません。であれば、警察としても、今のところは、事故死と判断する以外ないのです。だからといって、警察が、捜査を打ち切ったわけではないのです」瑞恵は、伊達を見つめた。「それじゃ、捜査は、続けられているんですか？本当に？」

伊達は話を続けた。「はい。極秘に、特命を受けた捜査官によって、捜査は続けられています。安心してください。瑞恵さん、今から話すことは、だれにもしゃべらないでください。約束できますか？」マスターはこの世で唯一の協力者に違いない、と瑞恵は確信した。「はい。決してだれにもしゃべりません。捜査のためだったら、なんでも、協力します。本当のことを知りたいのです」伊達は、身分を明かす決意を固めた。「今から話ことは、極秘事項です。絶対に、だれにも話さないように、約束ですよ。いいですね。実を言うと、私も、捜査官の一人なのです。出口巡査長の死は、大きな謎を秘めていると思われます。しかも、万が一、殺害であれば、非情に危険な捜査となります。うかつな捜査は、できないのです。瑞恵さんも、安易な聞き込みは危険です。組織が絡んだ殺害であれば、捜査している私たちも、危険にさらされるのです。言っている意味が分かりますか？」

話に耳を傾けていた瑞恵の顔に緊張が走った。兄が殺害されたとしても、だれかと喧嘩して、偶然起きた殺害ぐらいにしか想像していなかった。組織的な殺害といわれても、いったいどういう意味なのか、ピンとこなかった。「組織的って、どういう意味ですか？」瑞恵は、じっと伊達の硬い表情を見つめた。伊達は、少し躊躇したが、はっきり言ってあげることが、瑞恵の身の安全につながると判断した。「組織とは、韓国マフィアです。俗に言う、ヤクザです。特命捜査官は、危険を承知で、真剣に事件の解明に取り組んでいるんです。瑞恵さん。何でもいいのです、何か、気にかかった情報が手に入ったら、私に報告してください。自分勝手な行動だけは、決してしないように。いいですね」

ヤクザという言葉に瑞恵の体に震えが来た。対馬にもヤクザがいるとは、夢にも思わなかった。兄は、ヤクザの取り締まりをやっているときに殺されたのではないかと思った。「はい。何か、気になるようなことがあれば、マスターに報告します。でも、対馬のような孤島にもヤクザがいるんですか？」伊達は、韓国からの密輸の話をすることにした。「まだ、はっきりしていません。でも、ここ最近、麻薬密輸が多発しているのです。その一つのルートとして、韓国・対馬密輸ルートが考えられるのです。いいですね。今話したことは、だれにも話さないように。誰にもですよ」

瑞恵は、しっかり目を見開いてうなずいた。「兄の死の真相がわかるまで、とことん、捜査してください。警察を疑って、申し訳ありませんでした」伊達は、さらに念を押すことにした。「今後、仲間の特命捜査官が、対馬の警察官を連れて、このクラブに飲みに来ます。彼らからも、情報をとるためです。でも、警察官だからといって、安易に彼らを信用しないでください」今、警察官を信用してくださいといったかと思ったら、信用しないで下さいという。瑞恵は、何が何だか分からなくなってきたが、マスターを信用して、指示に従うことにした。「はい。マスターだけを信用すればいいのですね。早速、私は、何をやったらいいのでしょうか？」

やる気満々の瑞恵に笑いが込み上げてきた。「まあ、そうはやらずに。知りたいことは、お客の人間関係です。瑞恵さんがついたお客の人間関係をできる限り報告してください。それだけで、いいのです。決して、単独行動はしないように。そう、瑞恵さんは、歌がとても上手だとか？」カラオケが大好きな瑞恵は、ドヤ顔で返事した。「はい。カラオケ、大好きなんです。昭和の歌から、平成の歌まで、どんな歌でも歌えます。任せてください」カラオケと聞いて、ひろ子のことを思い出した。「へ～～、頼もしいですね。そう、知り合いのタクシー運転手に、カラオケ女王がいるんですよ。いずれ、紹介しますよ」カラオケ女王といえば、対馬の歌姫、ひろ子女王しかいないと思った。「まさか、カラオケ女王って、対馬の歌姫、ひろ子女王ですか？」

対馬の歌姫と聞いて、伊達は、ひろ子の知名度に驚いた。「ひろ子女王って、有名人なんですよ」瑞恵は、自慢げに話し始めた。「対馬で、ひろ子さんを知らない人はいませんよ。ひろ子さん、子供のころから、対馬の歌姫で、兄と同級生だったんです。ぜひ、お会いしたいです。特に、水の星に愛をこめて、最高です。なんて、幸運なんだろう。マスターもカラオケ女王のファンなんですか？」ちょっと、返事に困ったが、そういうことにして置くことにした。「まあ～、そうです。瑞恵さんは、どんな歌が、得意なんですか？」目を輝かせた瑞恵は、即座に返事した。「”そんなヒロシに騙されて”、です。昭和の歌です。ご存知ですか？」伊達は、聞いたことがなかった。頭をかきながら返事した。「いや、聞いたことがありません。一度、聞かせてください。楽しみにしています。もう、そろそろ、お客が増えるころです。仕事に入ってください」ニコッと笑顔を浮かべた瑞恵は、ウインクをして部屋を出ていった。